

特集

プロから教わる映画作り

# 映画制作スクール

今年で2回目の開催となる「映画制作スクール」。8月7日の脚本講座から始まり、9月22日にクランクアップを迎えるまで、さまざまな人と出会い、たくさんの経験を積み重ねながら成長した12人の中学生の「1カ月半の物語」を振り返ります。

監督、キャスト、裏方 全てが中学生

「映画制作スクール」は、市内の中学生が創造力や表現力、対話する力や伝える力、自尊感情などを養い、多職業への夢を持つことを目的に、昨年度から母国語教育やキャリア教育の一環として始まった取り組みです。東京で活躍するプロの指導を受けながら、監督・脚本・キャスト・照明・音響・撮影・衣装など

を中学生が主体となって行い、映画を完成させていきます。昨年度は、駄菓子屋のおばあちゃんと中学生との関わりを描きながら認知症について考える作品を完成させました。津嶋神社や国市池など市内8カ所のロケ地を巡りながら、映画を作り上げました。今年も新型コロナウイルス感染症の影響があり、実施も

8/7～23 リモート脚本講座



▲新型コロナウイルス感染症対策のため、脚本講座はリモートで実施

得意を生かし、チームワークに貢献

『みとよ物語「花」』では、淡い恋心と部活動で悩む中学生の心の葛藤が描かれています。採用された脚本を書いたのは、新延敏明さん（三野津中・3年）と細川扶美子さん（和光中・3年）。それぞれ別々に書いた脚本をまとめることで1本の映画にしました。学校の花壇を手入れするという共通点を持つ、面識のない生徒たちが織り成す2つの物語が交差しながら進行していきます。

新延さんは、脚本に加え監督も務めます。「今年は、各シーンのつなぎ方や構図を意識しながら映画を作っていききたいです」と意気込みます。また、助監督を務める細川さんは、「忙しい監督をサポートできるように、役者やシーンの細かいところまで気遣いができるようにしています」といいます。子どもたちは、自分の挑戦してみたいことや得意分野を生かし、それぞれ役割を分担。プロのスタッフたちの意識の高さを学びながら、一丸となってリハーサル、そして撮影に挑みました。

9/19 リハーサル



▲花壇も手作り！土を入れ、レンガで囲って作っていきます

9/13 ロケ地での脚本講座



▲事前にそれぞれが候補に挙げた場所を確認し、シーンごとの撮影場所を決めます



▲脚本家の皆さんと読み合わせをして、セリフ一つひとつが何を伝えたいのか、深掘りします



▲モニターを見ながら、塙 幸成監督から指導を受ける新延さん(手前)



▲「監督の掛け声に合わせてカチンコを鳴らすのも、助監督の大切な仕事です」と細川さん

脚本指導者に  
Interview

## 映画制作の楽しさを子どもたちに伝えたい

脚本家 黒沢 久子さん

映画制作は、脚本や監督だけでなく、役者、カメラ、録音、音楽、衣装など多岐にわたることから「総合芸術」と言われています。一人ひとりのやりたいことや得意なことを集約し、自分たちで一つのものを作り上げていく楽しさを体感してほしいです。

また、昨年も感じましたが、会うたびに子どもたちのやる気と成長に驚かされます。この映画制作スクールを通じてそれぞれが感じた「気付き」が、子どもたち一人ひとりの未来につながってくれればいいですね。







9/20~22

## 撮影風景 スナップ写真

撮影の様子を一部写真で紹介します

1. 淡い恋心を抱く中学生を演じた2人 2. 山下市長も学校の用務員役として出演！ 3. シーン中でも役者たちの髪形や服装に乱れがないかをチェックする美術スタッフたち 4. セリフがない部分も自然に見えるようにと、新延監督から指示が入ります 5. 部活動での葛藤を抱く中学生を演じた2人 6. 音楽の先生役としてご協力いただいたのは、俳優の安藤玉恵さん。さすがの演技に子どもたちも感動！ 7. 構図を確認しながらカメラを動かします 8. 安藤さんから役者たちに演技指導 9. 映画撮影で使われる大きなマイク。遠くの音まで拾います 10. 吹奏楽部のシーンの練習 11. 音楽室前の黒板や掲示物など、細かいところまで子どもたちで作成しました 12. 物語が進む上でカギとなる花壇。同時に進む2つの物語の主人公を結びつけます

『みとよ物語 ～花～』は後日、イベントなどでの上映を予定しています。日程が決まり次第ホームページなどでお知らせします



▶問い合わせ 学校教育課 ☎ 73-3131

参加者に  
Interview



田尾 紗彩さん  
(託間中・2年)

同じ役割を経験して、  
自分の成長を実感

今年の映画制作スクールを振り返って、去年より成長できたと実感しました。私は、去年も今年も役を演じたのですが、自分でも去年より良い演技ができたと思います。

今年は新型コロナウイルスの影響でリハーサルを含め、4日間での撮影となりました。4日間の撮影はとてもしんどかったのですが、映画に関する職業をしている人の変顔を少し理解することができました。

これからは、テレビを見るときに、ただ「おもしろい～」と思って見るのではなく、その作品を作るのに関係している方々のことも考えながら見れたらいいなと思いました。

参加者に  
Interview



嶋田 祥也さん  
(三野津中・2年)

最高の思い出

前は監督として参加しましたが、今回はキャストとして参加しました。周りに大人がいる中で役を演じるのは恥ずかしかったです。役を演じるのは思っていたよりも難しかったのですが、振り返ってみると、楽しかったです。

キャストになったことで人と関わる機会が多くなり、人と話すことが前よりも緊張なくなりました。東京から来てくださった脚本家、プロデューサー、撮影、女優の皆さんがいろいろと指導してくださいのおかげで、とても良い映画を作ることができ、最高の思い出になりました。普通に人生を過ごしていてもできないような体験をすることができました。

この映画制作スクールで学んだことを生かして、将来に役立てていきたいと思っています。

参加者に  
Interview



高城 小波さん  
(託間中・2年)

来年に備えて  
できることを

私は、映画スクールに参加するのは2回目だったけど、前回よりも成長することができました。まず、一つ一つのことをよく考えることができたようになったと思います。映画の撮影では、1シーン、1カットすごく丁寧に、気をつけてよく考えて、どこから撮るのがいいかを考えるので、とても神経を使います。でも、最後には、それにも慣れてきていました。

いろいろな人にたくさんのことを教わりながら過ごした4日間は忙しかったけど、あっという間でした。4日間の体験はとても大切な宝物になりました。完成が楽しみです。もし、来年もあれば参加したいと思います。それまでに今年映像にできなかった脚本を作り直したり、写真をたくさん撮って、普段の生活の中でもいい表情を見つたりしていきたいです。